

1枚の古写真 ～ “さよう子どもアートスクール” の取組～

さよう子どもアートスクール
(佐用町生涯学習課)

● “さよう子どもアートスクール” とは

平成16年度より『佐用の自然は○(まる)ごとアート!』をコンセプトに、知性の土台となる感性、自然の営みの中で育まれる豊かな人間性を養うために必要な体験活動(input)と創作活動(output)を佐用町内各地で月1回程度行っている。

佐用町内在住の小学生以上の児童生徒約20名で構成された小グループで組織し、そのグループ活動は高校生や大学生による“サポーター”によって運営され、異年齢交流によるコミュニケーション能力の向上やお互いを助け合う気持ちなど、団体行動による社会性を育てている。

また地域で活動する諸団体との連携を主とし、地域ぐるみの子育て、さよう子どもアートスクールとの事業を通じた、次世代に地域の自然や文化などを継承する取組やネットワーク化を図る役割も担う。

● “グループ活動サポーター” とは

さよう子どもアートスクールのグループ活動をサポートするために、養成講座を経た佐用高校生とそのOB・OGの有志。教員や保育士、介護職などを目指す生徒が主だが、サポーターの経験を経て将来の方向性を定める生徒や、学外での体験活動そのものを楽しむ生徒など、“さよう子どもアートスクール”は子どもたちの活動支援を目的とした青少年育成の場、子どもたちと青少年相互の学びの場としても機能している。

【2007年度の活動】

①	6月	3日	開校式(オリエンテーション)「アートスクールの旗を作ろう！」
②	6月	16日	塔陵祭探検!「サポーターのみんなを探せ！」
③	8月	3～5日	石井の自然はアートの宝庫!「チャレンジ!夏キャンプ」
④	8月	5日	千種川の日協賛イベント「川の温度を測ろう！」
⑤	8月	19日	清流千種川探検!「チチコ釣って、食す！」
⑥	9月	9日	県美わくわくワークショップ!「エルンストに挑戦！」
⑦	10月	20日	レッツ リサイクル!「ハガキづくりと墨流しに挑戦!!」
⑧	11月	17日	佐用郡美術展の秘密「“命”ってなんだ？」
⑨	12月	16日	石井の自然はアートの宝庫!「もちつき大会&古写真調査」
⑩	1月	27日	展覧会をつくろう!「ぷちキュレーター体験①」
⑪	2月	3日	みんなでギャラリートーク!「ぷちキュレーター体験②」
⑫	2月	11日	ひとはいこう!「第3回『共生のひろば』で発表！」

■ 「古写真調査」への道

昨年度は『地域子ども研究員』としてひとはいとの連携事業を図ったが、並行して今年度は佐用町の石井地域の住民自治組織「石井地域づくり協議会」との連携事業としての開催となった。

石井地域の人々とキャンプやもちつき、山登りなど自然の中での活動を共に体験していく中

で、子どもたちは現在の自分たちの暮らしと、親世代、祖父母世代の生活環境の違いについて考えるようになった。そこで、自然環境や生活の方法などがどのように変わってきたか、〈写真〉を通じて調べた。調べた写真は1月末の展覧会で発表した。

この一連の「探す」「聞く」「つくる」「伝える」の事業を通じて、子ども達が自ら学ぶ力をつけ、大人の目と記憶も借りて地域のことを考えられるようになればと意図した。放っておくと散在し紛失してしまう地域の記憶を集め伝える活動としても、十分な役割を果たすであろう。

■佐用の古写真（表題と解説：子どもたち）



三河小学校の旧校舎①
昭和30年代前半の写真です。おばあちゃんもこの校舎に通っていました（S10年頃）。



三河小学校の旧校舎②
昭和30年代後半の木造校舎です。現在は鉄筋コンクリートの校舎です。



三河小学校の旧校舎③
左奥の校舎が建てかえられ、今は全ての校舎がつながっています。



そうぎの様子
昭和42年ごろ旧佐用町石井地区でのそうぎ参列の写真。



冬だけど心がほっこり暖かい
昭和46年正月、春井家の縁下風景。木の暖かみ、正月らしさを自然と感ずる一枚。



温床づくり
昭和30年頃。落ち葉などをひきつけて温度（熱）を持たせ、その熱を利用し野菜苗作りをしていた。



木の橋をわたるお嫁さん
昭和 38 年ごろの、嫁入り風景。



廣業小学校校庭にて
この写真は、ボーイスカウトのパレードだそうです。坂の上は保育園。



昔の中学校
この写真は、1960 年ごろの佐用町立上月中学校をバックとした写真です。今は 3 階建てですが、当時は、1 階建てだったそうです。



嫁入の日に
結婚式当日、花嫁の父が正装して、送り出す用意をした。自宅の庭で。

■「古写真調査」から

子どもたちは約30年以上前の写真を調べるため、父母や祖父母に頼んで、思い出のアルバムを開くことになった。写真1枚1枚の“背景”が父母や祖父母から語られたことだろう。

1枚の写真の歴史的資料としての価値を問う以前に、さよう子どもアートスクール的にはそうした語らいの場、三世代のコミュニケーションを促進するツールとして何にも代えがたい価値がある。

その語らいや切り取られた風景から昔を知ること、先人の知恵に触れ、自分のルーツを知ることになる。現在と比較する作業は、変化する時代を知ることであり、当たり前のように感じている今の生活を見直すことになるだろう。また、写された情景は過去のものであっても、不易なものも発見したに違いない。

これからも子どもたちは変化を続けながら成長していく。変わっていくもの・変わらないもの、古写真調査は“大事なもの”を見落とさないで取捨選択していく能力の基礎を養うだろう。過去の記憶を現在につないでいく、その過程は子どもたちが健全に育つために不可欠な人と人との温かな心の交流がある。

石井地域の方々にも協力いただいた。見慣れた風景の過去の姿を知り、共有し、伝えていく。地域を再発見し、ふるさとへのまなざしが新たなものになったのではないだろうか。古写真を前に語り合いながら、記憶を再構築し、未来を見つめていくことで、地域づくりの一助になればと願う。

●最後に

さよう子どもアートスクールも4期目を迎えた。

毎年ひとはくの研究者の方々の強力なサポートにより、自然科学への新たな視点を子どもたちは獲得している。4年目にもなる古参メンバーは、主体的な参加はもちろんのこと、自ら課題を発見して解決していく意欲が高い。子どもたちの自発的な力は自然の中で育まれた4年間の成果かと思う。

今年度は兄姉的存在として関わってきた高校生・大学生のサポーターに加え、石井地域の方々との連携により、関わる人の年代や職種等層が厚くなった。学校でもない、家庭でもない、地域社会でもない、不思議な縁の集合体：さよう子どもアートスクール。佐用町の自然を学び舎にした、複合的プロジェクトとなった感があり、その姿は日々変貌している。

『大人こそはまる、“アートスクール”』、大人にとっても良い“遊び場”になっているようだ。子どもを主役にするために、弊害ある大人の介入を避けてきたが、大人が本気で事業を楽しみ、子どもと高校生をサポートする「ゆるやかな」関わりが今年は上手く機能したように思う。大人も子どもも、自然の中でこそ生き生きとよみがえる。自然のことわりであろう。まさにre-creation（レクリエーション）なのだ実感する。

一つのテーマの調査研究、探求には程遠いが、年々“何か”が生まれ育っている。ひとづくり、地域づくりの根底を支えるであろう、さよう子どもアートスクールの益々の進化を期待したい。

（文責：岸本秀子〈佐用町生涯学習課〉）